

昔話・神話にみる蛇の役割—知恵・生命・異性の象徴となる蛇—

近藤良樹

1. 人知を超えた知恵の持ち主

多くの人間は、へびを見ると強い恐怖に襲われる。この恐怖心から、へびの背後に、あるいはその見えざる本質として、畏怖すべき超越的なもの、神的なものをひとは想像した。その恐怖から、誇張された大蛇がうまれ、龍、龍神も創造された。龍神(=蛇)に攻撃されれば甚大な被害をもたらされ、その温情にふれることがあれば、幸運を授かるというようなことにもなった。こういう龍・大蛇の話をつくめて、へびに様々な役割をもたせながら、数多くのへびの話がどこの民族にも語りつがれてきた。

西洋の神話・昔話にも多くのへびたちが登場するが、そこにみられるへびは、まずはなんといっても恐怖の存在であり、醜く唾棄すべきもの・退治されるべきものとして現れる。かつ、他方では、やはり神的なものとして畏怖される面から、へびは、知恵ある存在として登場し、尊崇の対象ともなった。キリスト教の『聖書』によると、イエスは、「へび」を動物における知恵あるもの・聡明なものの代表と見なしていたようで、「へびのようにさとく、はどのように無邪気であれ」といった¹⁾。はとが、邪気のない存在だと言われれば、確かに、いたずらもののカラスのような毒気はなく、邪悪なものとは見なしにくい。それに対しては、へびは、知に秀でていて賢いと。そう見えたのであろう。『旧約聖書』によれば、エデンの園の二種類の禁断の木の実をへびは知っていた。知恵の木と生命の木の一つであった。その知恵の果実を食べようとイヴを誘惑したのは、へびであった。知恵をひとにもたらしたのは、へびだったということになるが、へび自体が賢そうにみえたので、そういう話になったのであろう。

ギリシャ神話のヘルメス(マーキュリー)は、生まれつきすばしっこく賢かったので、商売人から泥棒までの神となったが、その知恵を象徴する杖には、二匹のへびがつるんでいる。ヘルメスの知をになうこの蛇の知は、商人に役立つものとして実用的なものであったといえよう。だが、他方では、蛇の知恵は、観想的な知恵とも見られていた。静かに世界の声を聞き取る能力である。へびには、人知の及ばぬ理解能力が想定もされた。ギリシャ神話のメランプースは、へびの子をたすけて、やがて大きくなった蛇は、彼の耳をその舌でなめ、このことで、以降、鳥などのことばがわかるようになって、時の第一の予言者になったといわれている。へびの知恵を前提としていて、その神秘の知恵の一部を分けてもらったということである。

昔話(メルヘン)にも、同じようにへびのもつ特殊な知の能力を分けてもらう話がある。グリムの『メルヘン』の「白へび」²⁾では、王さまが偉い理由は、白へびを食べていることにあると言われる。この王さま用の白へび料理の一部をこっそり食べた若者は、鳥やかえるの鳴き声の意味内容がわかるようになった。若者は、これらの動物の話の聞き取ることで難事を解決し、王女と結婚し大成することになっている。動物の鳴き声の意味内容を理解できるという話は、日本の昔話にも似たものがあり、ふつうには解読不能の動物の会話を聞き取ることができる「聞耳棒」は、われわれでも、へびをたすけ、へびの親か主人である龍からもらうものである。

では、なぜ、へびが知恵をもつと想像されたのであろうか。おそらくは、その姿において異様なへびは、異世界（神や悪魔）の存在として、人知を超えたものを知っているというように想像されたのであろう。蛇は、どうしてか、ひとをつよく恐怖させ、これには大きな危険を感じさせられる（へびを恐れる理由については、拙稿「畏怖される龍・おろちのルーツ―神話・昔話の中の蛇たち―」（『広島大学大学院文学研究科論集』第66巻 2006年）を参照ください）。ライオンや虎が恐怖をもたらすのは、肉食獣としての危険がそれらに見出されるからである。だが、へびは、出合ってもひとに対して普通は牙を見せることはないし、しかも手足がなくて攻撃的にふるまうこともない。へびに食べられることなどありえない。身体的には、なんらの危険も見出せないのに、ひとは、恐怖させられる。われわれが人間に恐怖する場合、その人間の危険な様相は、ひとつは、強暴そうな武官的な態度において見出され、他方では、その言葉や文章から窺える、ひとを恐怖させる文官的な狡知において察知される。へびは、その容姿からすると、攻撃するための手足すらもたず、武官的威力からいうと軟弱である。それなのに、虎やライオン以上に人を恐怖させる。檻に入れられた虎は、牙をむいても安全で、怖くないが、ガラスケースに閉じ込められていても、へびは、怖い。その危険はその身体にあるのではなく、その狡知にあると想定しなくてはならないのであろう。

ライオンや虎は、その唸り声でもひとを恐れさせる。その声は、ひとでいえば、攻撃的な怒りの感情をいだいているように感じさせる。その怒りのパッション表明で攻撃的なことを示し、威嚇する。だが、へびは、声を発することもなく、慎ましく穏和である。それでいて、恐怖させる。そこにひっそりと存在しているだけなのに、強烈な危険を感じさせる。おしゃべりの蛙どもを、その一瞥で、沈黙させる。その感性や身の振り舞い様は攻撃的ではないとすると、ロゴスの理性的なものか、超越的な呪術的神秘的な何かが危険を感じさせ、これにひとは恐れおののいているのだということになる。さらに冷血動物のその冷たさは、熱っぽい腕力よりは、冷静で冷酷な醒めた意志を想像もさせる。

無表情（無感情）・無口も、へびが知的であろうとの想像を助長させる。ひとにおいて、自己の内面を隠すことは、幼児的であればあるほどしくくなる。内面と外面を区別し、うちにあるものを隠しておけることがひとの成長となる。隠せない単純なひとに比して、隠せるひとは、ということになる。ポーカーフェイス・無口は、うちにあるもの（知恵）を隠しているのであろうと推測され、知恵があるとみなされる。へびは、生れつきのポーカーフェイスであり、かえるなどちがって無口で、きりりと口を結んで、かまくびをあげて静かに世界を観想しているその様子は、賢そうに見える。

へびのつるんだヘルメスの杖は、生気を奪うといわれていた。へびを見たものは、恐怖して青くなり生気を失い、石のようにかたまってしまう。不可解な呪力や知力がへびには想定されねばならない。エジプトのファラオなどが頭に毒蛇を巻きつけて冠としているのは、へびにはひとを恐怖させる力があって近寄りがたいということで、高貴な存在を敵から守るのにふさわしかったのであろう。その威力は、身体的暴力的なものではなく、これをこえた知的呪術的な魔力であり、そこには人知を超えた畏怖されるべきへびの知恵が働いているということになるのであろう。

ひとが恐怖をもって受け取るへびの現実的危険性は、毒蛇の毒にある。毒をもって力をいれずして毒殺するのであって、非武官的で、知能犯の狡知が想定される。ギリシャ神話

のヘルメスは、すばしこくずるいことを巧みに行なう知能犯であった。知恵でもって、ひとをだまし、おどろかし恐怖もさせる神であった。その杖の二匹のへびはかれの狡知を表現する。キリスト教の『聖書』のへびも、イヴをたくみにそそのかす悪知恵ある存在として登場する。恐怖のへびが嫌悪の感情あたりと結ばれた場合には、へびの知は、しばしば悪知恵・狡知といった色づけをされることになる。

2. 永遠の生の持ち主

毒蛇は、ひとを噛み砕いて殺すのではない。腕力にも頼ることなく、呪力をもって猛毒をもって、ひとを死に至らしめる。しかも自身は、その猛毒を含んでいて平気なのであり、恐怖のへびは、生と死を支配する存在と見なされることともなる。ギリシャ神話では、アスクレピオス神（星座では蛇使い座）は、医学神で、一匹の蛇のからむ杖をもってあらわされる。世界の各地の救急車等の医療関係でしばしば蛇のからむ杖がマークにされているが、それは、ギリシャ神話でのこの神の杖に由来する。へびが生命を司ることを踏まえてのマークである（杖にからむ一匹のへびではバランスが悪く、ときに、二匹のへびのつるんだ杖を描いた病院などがある。二匹のは商売の神マーキュリーの杖だから誤りだと言われることがあるが、米国などでは「医も算術」だから、二匹のも正解であろう）。

ギリシア神話によると、占い師ポリュエイドスは、蜜のつぼに落ちて死んだグラウコス少年を生き返らせるためということで、死んだグラウコスと墓のなかに閉じ込められた。そこに、へびが出てきたので殺した。するともう一匹でてきて、死んだへびをみて引き返し、薬草をもって帰ってきて、それを死んだへびにつけると生き返った。これをみて、ポリュエイドスは、へびの薬草をもってしてグラウコス少年を生き返らせるのに成功したということになっている。へびは、生命を再生する方法を知っているもの、生命をつかさどるものと見なされていたのである。この話は、グリムの『メルヘン』にまで伝承されていて、その「三枚のへびの葉」³⁾の話は、ポリュエイドスと同じ内容をもつ。ただし、王がへびの薬草を知る役になり、死から蘇るのは妃ということになっている。かつ、のちに王は、その生き返った妃に殺されるが、自身もやはりへびの薬草でよみがえっている。

イヴが食べるようにとへびに誘惑されたのは、知恵の木の実であったが、エデンの園にはもうひとつ、生命の木の実があった。知恵の果実をたべたので人類は知恵をもつことになったが、へびは、生命の木の実をも知っていた。へびは、知恵とともに、生命の象徴でもある。古代バビロニアのギルガメシュ叙事詩に、ギルガメシュが永遠の命の得られる海草をとりに行き、かえる途中で、これをへびに食べられて、へびは、「脱皮」して若返り、永遠の生を得ることになったというのがある⁴⁾。へびは、生を支配し、永遠の生を保つものと見なされたのである。わが国は沖縄にも⁵⁾、へびが生き水＝若水を、つまり永生の水をとり、脱皮しつつ永遠の生をもつことになり、ひとは「死水」を浴びて、死ぬことになったという話がある。

蛇が生命をつかさどり再生して永遠の生を保つことになっているのは、世界各地の神話・昔話に共通したあつかいである。これは、永生の話が伝播していったというよりは、どこにもいる蛇の生態自体の特徴からそう見なされたのであろう。その生態とは、へびの「脱皮」である。脱皮して古い皮を脱ぎ捨てることで、新生がもたらされる。生まれ変わるのである。死んで皮となり、かつ再生しているものと見なされる。死を介しての再生・

生の復活である。現に植物は、それを繰り返して永生を保っている。秋には死んで、春よみがえる。これを、へびは、脱皮をもって繰り返していると見なされたのである。

また、老化がないように見えることもある。人間では一定の年齢になると大きくなりならず肥満するのみだが、へびは、生きていくかぎりいくらかでも長大化するように見える。ひっそりと生きているので、その死体も、横死したものしか見出せず、老化したよぼよぼのへびの自然死しているのをあまり見ることがないのも、永生のイメージを覆さなかった。へびは、高等な哺乳類とちがい、身体を切断しても即死しない。そのしぶとさも、生がひととちがい強力だということになった。

それと、先に触れたように毒蛇がひとや動物を死に追いやることも関わってこよう。生死をつかさどるということである。ライオンのように暴力をもって牙や爪で切り裂いて殺傷するのではない。不可思議な毒をもって、力をいれずして死をもたらすのである。死を支配するということは、生を支配するということでもある。

神格化されたへびになると、龍神がそういうことだが、これは死なない。神としてまつられた動物たちは一般に死を免れる。それは、人の想像力が貧困だからという理由でそうなるのである。抽象的に想像の世界に描きあげられる神たちだが、それは抽象的に描かれているだけなので、現実的具体性を欠き、だんだん老化していく現実的生命体のようなことをその想像の神々において描くことができない。そのため、生きて元気なままにしてしまい、結果的に神々は永生を保つようになる。これは、蛇神・龍神のみの属性ではなく、神々一般の属性である。ひとの想像力の貧困が龍神を永遠のものとし、その現れかその使者である現実の蛇を永生のものとしているのである。

現実に存在する「池の主」のおろちも、永生を保つように見える。これは、八百比丘尼や常陸坊が何百年もの長寿を保ったのと似た事情による。本当は個人としては入れ替わり死に替わりしていたとしても、義経の家来の常陸坊のことを、本人であるかのようにしてありありと語る講釈師たちは、何百年も前の常陸坊自身となって、聞く者と自身を酔わせることができた。一家の家長は、同一名で「柿右衛門」「源兵衛」で何代も続くことがあったが、これも「14代柿右衛門さん」ではなく、いつの代でも「柿右衛門さん」で呼ばれる。初代から伝統的に同様の「柿右衛門」の絵皿を作り続けていたとすると、初代も14代も無区別になって、初代からひとつにすると相当に長命となることであろう。これらと同様に、時々に見かける「池のぬし」は、本当は代替わりしていても、区別がつかなければ、人はこれを同一の池の主とみなすことになる。山の主のいのししや熊は、片耳がかじられていたりして個体の識別が可能なことが多く、「ぬし」が替わるとそれと認識される。だが、へびの場合、同種なら一見しただけでは識別は困難である。恐怖しての一見では、冷静な観察は無理で、いつも、「気味の悪い大きなへび」を見るだけとなろう。仮に、これを無我夢中で殺しても、しばらくしてまた同一の池の主がよみがえっているのを見ることになり、その不死身にひとびとは、一層恐怖させられることになる。

3. 執着の象徴となるへび

わが国では、へびは、執念深さ・執着心の象徴となることでも目立つ。『今昔物語集』に、紅梅の木を愛惜していたひとりの娘が死んでのち、その木のもとへ小蛇があらわれ、両親は、それを娘の生まれかわりと解し、法華経を講じて成仏させたという話がでてくる⁶⁾。

梅の木に執着しすぎてそれにまといつくへびになったのである。『古事記』によると、垂仁天皇の子が「ひなが（肥長）ひめ」とむすばれたが、この「美人」をそっと見たところ、なんと「蛇」であった。これに驚いて逃げたものの、しつこく追いかけてきたという話がある⁷⁾。「道成寺」説話では、こういうものが一層劇的に展開されていて、女性が美しい僧に愛欲をもち執着して、とうとうへびにまで変身しておいまわし、鐘のなかに隠れたその僧を焼き殺してしまう。『今昔』の話では、死んだ美男の僧は、結局は、蛇になって、その女のへびと夫婦になったという。これを、美男の僧と連れであった老僧が法華経を書写し法会を行い供養した。二匹の蛇は、いずれも生まれ変わって天に昇ったという⁸⁾。それにしても、殺しても契りを結ぼうとは、凄まじい執着である。へびは、われわれにおいては、ときに、このような「執念深さ」の具象化された存在となる。

そう見なされることになったのは、ひとつには、さきに触れたように、へびが簡単には死なないからであろう。繊細な哺乳類などちがって、体を切断してもへびは即死しない。『古今著聞集』には、釘にうちつけられて屋根に60余年閉じこめられて生きていた蛇の話がでてくる⁹⁾。まさか何も食べずでは、そこまでは生きないであろうが（近づいたねずみなどを食べていたのであろう）、われわれのように一日たべないと目を回すような存在からいうと、気の遠くなるようなスローテンポでの生の展開である。へびは、生へのねばり強さをもっているということだが、恐怖をもたらす唾棄すべきもののそれとして、否定的にとらえられ、「しぶとい」「執念深い」ということになる。

その生態も執念深さを覗かせる。かえるを狙うへびは、これを襲うチャンスをまって、いつまでも、じっとしていることがある。ひとがたじろいで不動の状態になっていると、かれらの方もどういふわけか時にいつまでもじっとしていることがある。『今昔』に、小用をしようとしやがんだ女性がへびににらまれて何時間も動けなくなり（「二時」と言っており、今でいえば四時間）、一緒にいた女兒がとうとう泣きだしてそのことがわかって、通りかかった男がこの危機から救い出したという話がある¹⁰⁾。それだけながい間、へびはじつとその女性をにらみつけていたということである。実際には、ひとが勝手に恐怖しその場から動けなくなっているだけなのに、へびは執念深いということになっていく。

へびへの恐怖は、持続するのが特徴である。恐怖は、危険なものを前に、それからの危害を少なくしようとかまえる心身の防衛反応になるろうが、災いの可能性に反応しているもので、其の危害が現実になるとときには、痛みがとってかわり、恐怖は、消滅する。だが、虎やライオンとちがって、ほんとうは非暴力平和主義のへびは、ひとを襲うことはなく、したがって、恐怖から痛みへの展開がなく、いつまでも人を恐怖させ続けることになってしまう。

へびというと「しぶとさ」「執念深さ」が想起されるのは、執念深いことが社会関係のなかで唾棄すべきひとの態度とみなされているからでもあろう。必要ならばどこまでもこれを追求し、なにごとく徹底してやることに高い評価をあたえる社会では、執着は、そうむやみに否定されるものではないであろう。グリムらの昔話では、へびが執着の象徴とされることはあまりないのではないか。龍（大蛇）のあたまをきっても、はえかわって、しつこいというような話はあるが、われわれのように顕著ではない。われわれの場合、「あきらめが肝心」であり、いつまでもしつこく追求することは、なににつけても、嫌われがちである。あっさりとしていなくてはならないのである。なかには、しつこいものもいて、た

まにはごね得をすることもありますが、そういうひとは、下賤とのレッテルをはられて、ふつうには良い目にはあわない。そういう点からいうと、へびの（少々の傷では即死しないし、いつまでも蛙をねらってじっとしていたりする）生のしつこさは、われわれ短気な気性のものには、ゆるしがたい唾棄すべき態度と映るのである。

へびは、執着するのみでなく、食欲・欲張りな存在と見なされることもある。その生態において、ねずみや鳥のたまごを飲むときの姿は、食欲そのものである。自分の胴回りよりはるかに大きいものを、あごをはずして強引に呑み込もうというのである。呑み込んだ後は、その獲物がおなかにあることをはっきり知ることができ、大きくそこが膨らんでいる（ニシキヘビがヤギを呑み込んで動けなくなって捕獲されたというニュース写真を見たことがあるが、胴体は風船のように膨らんでボクシングのサンドバッグのようであった）。だが、へびは、人間のように、余計なものを食欲のためにこむことはない。ねずみや鳥のみこむとしても、そうむやみにむさぼるようなことはせず、呑み込んだものを消化するまでは、獲物がいたとしても、追っかけたりはしないのではないか。そんな食欲なことをするのは、人間ぐらいであろう。

日本では、へびは食欲の象徴ともなり、よくばりがお金に執着し、死んでお金にまわりつく蛇になったというようなことになる。『日本霊異記』¹¹⁾ や『今昔物語集』¹²⁾ には、邪見で物おしみのつよい僧が、死んでもなおお錢に執着して、大蛇の身になってこれを守っていたという話がある。あるいは、『今昔』は、念仏してきれいに死んで、極楽にいったと皆に思われていた僧が、ささいな欲心のために、極楽にはいけず、棚のうえのつぼのなかで小蛇にと生まれ変わっていたとも語る。弟子のひとりの夢に出てきて、つぼを下ろして誦経をしてくれと頼むのであった。なんでも、死のまぎわに、棚のうえのかめをみて、自分が死んだらあれは「誰取らむと為らむ」¹³⁾ と思ったら、その罪で小さなへびになって、そのかめのなかに生まれ変わったのだという。

4. そのエロス1－男性の象徴

へびは、その頭部が男根に似ているので、その点からは、性的に男性を象徴することになる。『肥前国風土記』によると、「おとひ（弟日）姫子」のところに夜毎来る男がいた。素性が分からず、どこに帰るのか、後をつけるため、その衣に麻糸を付け、帰ったあとをたどったら、沼にいる「蛇」になっていた。身は、ひとで沼に沈み、「頭は、蛇」だったという¹⁴⁾。『常陸国風土記』では、「ぬか（努賀）ひめ」のところに夜ばいする夫とのあいだには、へびが生まれたという¹⁵⁾。このへびの子は、天に帰るべきものとされている。父親は、へびの親であり大蛇であるが、この父の居所は天にあって、龍神＝雷神という想定である。

『日本書紀』には、かよってくる夫は夜のことで顔がわからず、朝みせてくれるようにと請うと、では「くしげ」（化粧箱）にはいっておくからということになり、翌朝見たところ、「小蛇」になっていたというのがある¹⁶⁾。女がこれにおどろいて叫ぶと、元の人＝夫になって、恥をかかされたと言って出ていってしまう。女は、これをなげいて「箸を陰（ほと）に撞き」死んでしまい、墓は「箸墓」といわれているという。この女性は、「やまとととひももそ（倭迹迹日百襲）姫」で卑弥呼だったのではないかとも言われる。三輪山の神（大物主神）＝へびが夫ということになっているようだが、不審を抱かせるものが夜の夫

にあったのであろうか、翌朝よくよく見ると、小蛇であったという。わりと赤裸々に性をかたる日本神話のことであるから、そのへびは、男根と見てよいであろう。分かりやすい話である。小さくて恥ずかしかったのは、無理のないことである。

分からないのは、「やまとととひももそ姫」（この名も奇怪である）が「箸」で女陰をついて死んだことである。昔話や神話では、内的なものを外的なもので表現することが多い。内的狂気を外的に、天邪鬼が取りつくとするように。「眠り姫」などの内的な変化としての初潮を外的に「錘の先で突いて血がでた」とか「櫛けずっていて傷つけ血がでた」という。それに類したことだとすると、箸で傷つけるとは、他者によるのではなく自らが「ついた」というから、おそらくは、へびの夫の子どもを生むことをさし、箸＝蛇の出産時に母親は大出血で死んだということになるのであろう。三輪山の神＝大物主神は、「せやだたら（勢夜陀多良）姫」を妻にするときには、「丹塗矢」になってその「ほと」をつくということをしている¹⁷⁾。「矢」が大物主神＝蛇（＝男根）をしめしている。「箸」は、「矢」よりは、ずっと威力は小さいから、蛇（＝大物主神）の子（胎児）をさすのであろう。「箸墓」は、ももそ姫の墓ということであるが、「箸」の墓であるから、同時に箸＝大物主神の子の墓でもある。出産時に母も子も死んだのである。箸墓には、母子が共に葬られていると見るべきであろう。

日本の昔話には、「へびむこ」といわれている話が古くからある。『日本霊異記』によると、かえるを呑み込もうとしているへびを見た女性が、かえるをたすけてくれるなら「我、汝が妻と作らむ」¹⁸⁾と約束した。へびは、かえるを放すことを承知し、後日この女性を妻にしようと家にいった。だが、女性は、へびの入ってくるのを拒否しつづけ、別の折に助けていた蟹がへびをずたずたにして、彼女をへびから救ったという¹⁹⁾。約束の破棄は、グリムらのメルヘンでなら、かわいい王女のそれであっても許されず、王は、これを守るようにと強制するであろうが、われわれの昔話の王様＝ぢぢ（父）は、約束破棄を当然とする。日本の昔話は、この約束不履行の悪については、一切問わない。『古今著聞集』や『今昔物語集』²⁰⁾に同様の話がでてくるが、ここでは、父親の方がへびに「そのかへるはなて。さらばわがむこにとらん」と約束する²¹⁾。だが、厚顔無恥にも、それを果たさないのみか、やってきた蛇が蟹にずたずたにされるのを父親と娘はまつ。

昔話のへび婿には、もう一系統があって、早魃の危機に、田に水をいれてくれるものがいたら婿にしようという話で、それをへびか、猿が果たす（これも結婚の約束を破棄して父も娘も平気である）。水の支配者は龍であり、おろちであるから、蛇であり、これが田に水をいれてくれるというのは、誰もの納得できる話であった。いずれのへび婿の話でも、へびは、その外見からであろう、男と見なされている。父親が見ての異性としてへびがあるのなら、「わが妻に」「わが嫁に」というであろうに、「わがむこに」と言ったということは、いずれにしても、へびをみて、女性はもちろん、父親＝男性も、これを男性（男根）と受け取ったということである。

さらに『日本霊異記』などには、赤裸々にへびが男根とみなされる奇怪な話もでてくる。桑の木にぼっていた娘に、へびがまといつき、ともに木からおちて、へびはその女陰のなかにはいり大騒ぎになった。なんとかこれを除去したのだが、三年後にまたそういうことになり、娘は死んだ。死の間際、夫のへびを恋い後世に「また相はむ」と言ったという²²⁾。『沙石集』では、昼寝をしていた女性にへびが寄りそい犯していたので、夫がこれを発見

して杖で打ち払ったという話がでてくる²³⁾。『古今著聞集』にも、似た話があって、昼寝していた女性にへびが垂木から下りてきて近寄ろうとしていたので、男がこれを追い払ったところ、彼女は目覚めて「うつくしき男のきて、われを懸想しつるを」と、とても残念がったという²⁴⁾。女性が横になっていて、これにひきつけられるかのようにへびが近づいていくとしたら、このへびは、その姿からして、男性と見なされて当然のことであろう。

男根・男性の象徴となることは、グリムらでもそうで、グリムのなかにある「地下のこびと」²⁵⁾では、ドラゴンたちは、三人の姫を地下に誘拐してこれを閉じこめ、(危害を加えたり恐怖させるのではなく) ひざまくらをさせて、しらみをとらせながら寝ることになっている(昔話は、大人の話だった。かつての好色話の痕跡になると見てよいであろう)。なお、ドラゴン=龍は、絵に描かれるものでは、羽をもつなど蛇からはかなり逸脱した姿になっていることが多いが、原型が恐怖の蛇であることは、東洋と同一であろう)。長女が相手をさせられたドラゴンは、頭が九つあり、次女のは七つ、三女のは四つあったという。ドラゴン=蛇は、男性(男根)であるが、頭が複数あるのは、複数の男性ということであろうか。白雪姫の「七人の小人」のように、男子のみで集団生活(わが国にも「若者宿」があった)をしていたところへかどわかされたものと想像される。『聖書』の中のへびも、アダムではなく女性のイヴを誘惑するのであるから、男性ということであろう(イヴを誘惑したその内容が木の実を食べることだけだったとは思にくい。アダムとイヴの子孫達の一般的な行状から推測していうと、男子より早い目に思春期に入ったイヴを、禁断の木の実をプレゼントに蛇がエロスの世界へ誘惑したと見るのが自然であろう。知恵の木の実であるから、イヴは自身が女であると知ることへ、女性と自覚することへと促され、へびを男として知ったのである。イヴの誘いで、アダムも自身を男と知ることになり、性に目覚めた。食べた木の実でかどうか、イヴの胸には二つのふくらみが顕著となりアダムにはノドボトケも出てきた。こうして二人は、はじらいを知る歳となりイチジクの葉の出番となった、というような筋になるではないか)。

なお、男根であるが、これは、古い宗教では信仰対象であった。農作物を中心にした生産での生産力を維持するために、ひとに備わる性の生産力が頼みとされたのである。女性の生産力を担う女陰には、呪力が備わっているともみなされていた。男根は、いまでも、信仰の対象とされることがあり、ヒンズー教のリングは、端的に、崇拝される男根である。日本の神社などにも大きな男根のご神体をつくって崇拝の対象としているところがある(女性の方のご神体としては、岩の割れ目などがそれに見立てられている)。チベットには、いまでも(チベット仏教やヒンズー教の)厚い信仰を集めている、天に聳える男根の巨峰カイラス山もある(「グーグルアース」で上空から見ると、このカイラス山を中心にした山岳地帯は、リングとヨーニからなるなんとも卑猥な巨大な地形を作り出している)。へびは、こういう男根と同一視されるとしたら、生産力の源とみなされうる。古い時代には、龍や大蛇には、そういう能力も期待されていたであろうが、西洋では、昔話(メルヘン)に残ったドラゴンには、生産に関わる役割りは与えられていない。東洋の龍には、洪水と旱魃に対処する必要から、生産の豊饒への願いがこめられている。が、農作物を中心とした生産力ということでは、龍や蛇にこれを求めるよりは、直接、リング(男根)に願いをこめることになっていた。つまりは、へびは、知恵や永生、エロスの象徴となるような顕著なレベルでは、生産力を象徴するものとはなっていないといえるであろう。

5. そのエロス2－女性の象徴

不思議なことに、へびは、女性をあらわすこともある。その姿からいって男根そのものであるから、男性の象徴となることはわかりやすいが、女性となるのは、その姿からは、どうも想像しにくい。えものを呑みこむその口は、大きく開かれ丸呑みするが、その呑みこまれるものが、へびの口からのどにふくみこまれた男根のすがたを想像させるのだとすれば、へび自身は、女性となっているのではある。

あるいは、その生態から何か女性的なものの感じられることがあるのであろうか。いまと違って男尊女卑の時代には、女性は発言をつつしみ、内心を表情に出してはならないし、何事もじっと耐えぬかなくてはならなかった。その意思はひめられて持続し執着にもつながらやすく、へびの無口・無表情・忍従・執着と女性は一致することとなったのであろうか。身近な動物では、いのししとか熊は、暴れて腕力にものを言わせ男性的であるのに比していうと、へびは、平和的で控えめで穏和で無口でと女性的である。

龍神の子供の場合は、女性になるというか、娘が話題になる。冒険の旅にでることで竜宮に行くのであり、そういう旅をするのは、若者の男子である。とするとそこで深い縁を結ぶのは、竜王の娘ということになる。山幸彦の得たものは、豊玉姫であった。浦島太郎は、龍宮に行って乙姫と結ばれた。龍は、本来、へび類であろうから、乙姫は、へび類になる。しかし、われわれの知る古くから言われてきた浦島の乙姫は、へびではなく、亀だったようである。龍のこどもは、へびになり、亀自体は、龍の子ではないであろう。養女だったのかどうか知らないが、とにかく、乙姫は亀である。古くは、姫の名も乙姫ではなく亀姫となっている。亀には、亀頭というものがあるから男性であろうが、浦島では女性扱いになる。亀も、その亀頭をひっこめたところは、亀頭の入る穴となる。浦島は、亀頭の入り込んだあなを見て、「うん？わしの亀頭もはいるかの？」と想像をたくましくしたのかもしれない。亀頭を引っ込めた亀は、女性になる。『今昔』にも、亀を女性と見なした話がある。備後の国の海岸でのこと、網に一尺ほどの亀がかかった。痴れ者がこの亀をみて取り上げ、これは逃げられた我が女房殿だといって、首を引っ込めたところに「口吸はむ」²⁶⁾ とキスをした。その途端、すでに入っていた先客の亀頭に食いつかれてしまい、おおごとになったという。亀頭は、ひっこめば女性となった。

肥長姫がへびになっていたという話を（執着の象徴ということ）先にあげたが、「道成寺」説話の場合も女性がへびになる。それらは「執着」の象徴になっているだけのことも解しうるが、へびそのものが女性になる話もある。『今昔』によると、三井寺でのこと、広い部屋で居眠りしていた若い僧が、美女に交わる夢をみて、さめたところ、五尺ほどのへびがくちをあけて死んでいた。見るとその僧の精液を吐き出していた。その若い僧は、自分の勃起した件のものを「蛇の見て寄て呑ける」²⁷⁾ を美女と交わったように夢にみたのだろうと言っている。『古今著聞集』は、「妻嫉妬して蛇と化し夫の件物に喰付く」²⁸⁾ ことになった話をあげる。浮気していた現場に現れた妻の化身とおぼしきへびが「件のかしらにあやまたずくいつきにけり」という。亀の亀頭の引っ込んだ穴ほどのことではないとしても、口を首元まで大きくさき、獲物をくわえ呑みこんでいくその姿において、獲物が男根様に想定されるなら、へび自体は、女陰とみなされる。しかもへびに恐怖する男子は、へびに一体化することはなく、へびの獲物と自身を重ねる。マゾヒスト的に恐怖と快感を

もって、呑みこまれるその状態を体に、くだんのものに感じえたのかも知れない。

「蛇女房」の昔話は、もともとへびであるものが、妻になるわけで、蛇が狡知や執着の象徴としていわれているものではない。へびが、ここではその性において女性になっているのである。蛇女房の類いの話は、女房は、蛇には限定されない。「魚女房」「つる女房」「きつね女房」等多彩である。

わが国の昔話の異類婚では、女性の場合、つまりは婿の場合は、身近にいる家畜か、野生動物ではポピュラーなものとしては「へび婿」か「さる婿」ぐらいになる。犬婿、馬婿は、親しみすぎると、そういうことになりかねない。野生では、猿のようにひとに近く知恵にすぐれたものか、男性の男性たることを想像させるへびぐらいになるのであろう。男子として力があってということでは、なんでもよいことにはなりにくい。「たにし」を夫にする話もあるが、これは、その形が男性の件のものの小型版であることに男性の資格が付与されているのであろう。

男性が結婚する相手の動物はというと、これは何でもいいのではないか。男子の異類婚は、そとにでて冒険する過程で成立するものとしては、多彩になる。きつねに出会うものもおれば、へびに出会うものもあるし、鳥に恋するものもある。ブヨや蜘蛛でもよかった（ブヨも、まといつくしつこさでは一目おかれる）。男性としては、女性になりうるものならどんなものでもよかったのである。蛇女房は、たまたま、蛇に出合っただけということであり、男性が出会うから、へびは、(本来かたちからは、男性なのに)女性にされるのであろう。男性は、性欲旺盛なときには、なんでも女性にみたてた。僧院や軍隊では男ですら女性に見立てた。ばちあたりに仏像に淫することなど朝飯まえで、なかには植物の蕪を相手に情欲を満たして、『今昔』に「かぶらをとつぎて子を生ぜる(娶蕪生子)」²⁹⁾と、話のたねを提供するものもいた。瓜子姫は、瓜から生まれたというが、ひょっとしたら、かぶらではなく、瓜を相手に「うりをとつぎて子を生ぜる(娶瓜生子)」と情欲を満たした者がいたのかもしれない。

グリムらの昔話では、動物との異類婚は、原則的に許されていない。一見、動物と結婚する話でも、そのへびや熊たちは、もともと王子さまで、悪魔が魔法で動物に変身させているだけといわれる。その悪魔による動物への変身から、もとの人の姿に返せるのが、お姫さまとの結婚である。われわれの蛇婿、蛇女房は、正真正銘のへびとの異類婚であるが、グリムらの異類婚は、見せかけだけにすぎない。ひとと動物は、厳格に区別され、結婚は禁じられている。その異類への変身であるが、すがたは男根のへびは、当然、男性・王子になり、大蛇・ドラゴンも男性ということになる。だが、女性となっている場合もある。グリムの『メルヘン』の「黄金の山の王さま」³⁰⁾では、お姫さまが、魔法によって蛇にされる。同じく「鳴きながら跳ぶひばり」では、悪い姫が、竜(Lindwurm)にされている³¹⁾。同じグリムの『ドイツの伝説』では「下半身が、恐ろしい蛇」の「へびむすめ」も言われる³²⁾。もっとも、それは、奇怪なもの・醜いものに魔法で変身させられるということであり、かえるでも二十日ねずみでもいいのであって、かならずしも、へびでなくては、というものではない。

6. へびに咬まれる話

『イソップ寓話』のなかに「百姓と<寒さに凍えていた>蛇」³³⁾という話がある。百姓

が寒さに凍えていた蛇を見つけ、かわいそうに思って、これを懐にに入れて暖めてやった。だが、へびは、暖まったら、この恩人に咬みついてその毒で殺してしまった。百姓は、死をまえに、「悪いやつに情けをかけた当然の報いだ」と言ったという。こういう話は世界の各地にあって、へびは、知恵の象徴ではあるが、ほんとうは善悪の基本も解さない原始的な異類にすぎないという現実を語るものである。はとは、イエスが「無邪気だ、素直だ」といっても、まちがいでではなく、そう見なして近づいても、何ら現実的な問題は生じない。しかし、かれが「へびのように、賢く」といったことを真に受けて、親切心からへびを助け、懐にに入れて凍えた毒蛇を暖めることなどしても人間的応答を期待することはできない。それどころか、場合によると、毒をもって報いられることになる。へびは、ものを言って分かるような高等な動物ではない。哺乳類に比してはるかに低いレベルの動物である現実をしっかりとふまえるべきだという話が出てくるわけである。

へびの忘恩の話は、へびが知恵をもち、神かそのお使いのようにあつかわれるのに対して、そんなばかなことはない現実からこれを否定しているのである。爬虫類であるから、飼っても哺乳類のように人間の生活にとけこんだり、ひとの心を理解してというようなことにはならない。へびは、一方では神のごとくに見なされるのだが、現実的には、無知で冷血の存在であって、このことを忘れてはとんでもないことになる。この低級な爬虫類の人間的世界からの遠さは、人間的なところへよみかえられるとき、単に原始的というのではなく、忘恩無恥な無頼漢にされることにもなる。実際は、恩も恥も知らないわけだから無恩、欠恥なのだが、それを人間のように恩義や羞恥心をもてるはずのものに見なして、これを欠いていると非難するのである。

われわれの昔話にもそういう話がある。かえるにたすけられたのに、そのかえるを呑みこもうとするといった話である。もちろん、自然の道理にしたがって、ということではなく、助けられたことを了解しながらも、これへの恩を感じることなく、忘恩にも、という設定である。破廉恥な人間の象徴としてへびが登場させられているのである。『イソップ寓話』のなかの「百姓と<寒さに凍えていた>蛇」の話も、忘恩ということである。

話のなかには、人間の忘恩を語るために、逆にしているものもある。たとえば『今昔』では、洪水で船を用意した男が、流れてくるへび・きつね・ひとを救けたが、ひとのみが忘恩で、へび・きつねは恩義をかんじて恩返しをしたと皮肉る³⁴⁾。類似の話は、世界中にあるようで、穴に落ち込んだ虎・猿・へび・人間等を救けた恩人に対して、人間以外のもの(虎・猿・へび等)は、恩返しをする。だが、人間だけは、それをやらず、忘恩どころか救助者をおとし入れることまでするのであった。冷血なへびにも劣る破廉恥な人間という話である。

へびは、ひとを恐怖させ、これを好きになるひとはあまりいない。一般的には、へびは、醜い嫌われものということになる。この現実を語る昔話・神話も当然存在する。ギリシャ神話のメドゥーサは、頭髮がへびで、地下に住み、その姿ゆえに恐れられ嫌われる存在であった。グリムでは、お姫さまが蛇に姿を変えられる話がある。醜い唾棄すべきものになるということであり、蛇の他に蛙になるのもある。へびは、恐ろしいものというよりも、醜く気味の悪い嫌われ者という想定である。グリムの『ドイツの伝説』の「へびむすめ」や「かえるの椅子」では、蛇は、醜い存在であり、これに女性が変身させられる。後者の話では、ごうまんな娘が、のろわれて、醜くきらわれものの「へび」や「蛙」にされる³⁵⁾。

一週間目は、へび、二週間目は、かえるになり、三週間目に娘のすがたに還るというくりかえしである。

へびは、地をほう穢らわしい存在として唾棄されるのが、古くからの実際である。『イソップ』に「マムシときつね」「ゼウスと蛇」³⁶⁾と題されている話がある。前者では、いばらにしがみついて流れているまむしをみて、きつねが、「船に似合った船頭だ」と言いはやすのであった。後者「ゼウスと蛇」によると、ゼウスは自分の結婚に動物からお祝いをもらうことになり、へびは、バラの花を口にくわえてもってきた。だが、へびの贈り物だけは断った。「他のもののだれの贈り物もいただくが、おまえの口からもらうのはまっぴらだ」と。へびは、古くから一番の嫌われ者になっていたのである。

7. 濡れ衣を着せられた平和主義の蛇たち

へびは、冷血で悪魔の手先のような存在で、ひとの祖イヴをだまして神の樂園から追放されるようにした元凶であり、それ故に、ひとから憎悪される存在になっている、といった話が西方世界には広く流布している。この話は、へびについて、ひとがこれを一方で知恵あるものとしていること、他方で、理由なく恐怖させられ不愉快な存在で抹殺したいぐらいに嫌悪し、憎悪しているといってもいいほどであること、この両方を踏まえて作られているものになる。人類が、「目が開け」「神のようになり」「善悪を知る」³⁷⁾ ことになっているのは、ひとえに、へびのおかげだから、それからいうと感謝すべきである。へびからいうと、人類は恩人に対して逆に難癖をつけて、逆恨みしているのであり、忘恩もはなはだしいことになる。しかし、どうしてか分からないが、ひとは、現に、へびを唾棄し、見たくもないし、存在してもらいたくもないと、いわば憎悪ともいえるような感情をいだいている。この事実を合理化するため、神からは知をもつことは禁じられていたのに、へびが知恵の果実を食べるようにそそのかしたのだと話を作り上げたのであろう。ひとは、神との約束も命令も守れないというおのれの意志の弱さを棚に上げて「恩をあだで返す」のである。恩人のへびに責任を押し付けて、これに、いわれのない憎悪心をいだき、逆恨みしているのである。

天使のようなこどもたちですらも、へびを見つけたら反射的といってもよいぐらいに、石などをなげつけてこれを殺そうとする。もし、それが子犬とか公園の「矢鴨」でもあったら、「なんと残酷な」と今の日本のマスコミでならニュースざたになるが、へびについては違う。子供達が蛇を見つけて騒いでいると、女の先生は「早く殺しなさい！」とけしかけ、元気な男の先生は、こどものもっている石をとりあげて、自分がなげつける（最近の若い世代は、温厚だから、こんな乱暴な事は、あまりしなくなっているかも知れない）。人類は、へびを憎悪しているといってもよい。

たんなる怒りとか嫌悪なら、その存在を遠ざけるだけでよい。われわれのへびへの振るまいは、そういうものではなく、感情でいうと憎悪の反応となる。その存在そのものを抹殺したいのである。樂園追放の元凶との聖書の想定は、なんらかの仕打ちをうけたものと考えたくなくぐらゐの憎悪感をひとが蛇にもっていることを踏まえたものであろう。

聖書のへびの話はさておいて、へびからの仕打ちといえるようなものを人は受けているのであろうか。毒蛇の被害は、たしかにあるが、相当に特殊なことになろう。一般的には、そのすがたの奇怪さがあるって、強い恐怖をこれに感じさせられることが、現代人にも仕打

ちといえば仕打ちということになるのか。恐怖させられるが、すこし冷静になると、たかが杖の大きさの青大将など、何一つ危険なものを持っていないのである。いたずらで、だれかに「わっ」とおどされてびっくり仰天して、なんでもないとわかったとき、相手に立腹することがあるが、あれとおなじである。危険な存在でもないのに、たいへんな恐怖心をいだかせてくれて、おかえしをしなくては気がおさまらないということである（もちろん、へびからいうと、勝手に人間が恐怖しているだけであって、ひとのこの恐怖をもつての反応こそは、いわれのない偏見・差別であり、ひどい仕打ちになるというべきであろう）。

へびを石打の刑に処するのは、恐怖させられたことへの仕返しもあるが、かならずしも恐怖していないのに殺そうとすることもある。田んぼのねずみやもぐらに対するのと同様で害虫害獣退治の感じである。たぶん、奇怪なもの・異世界の存在には、この世界での生存を許したくないということがあるのであろう。異質のものを排除しようということである。みみずをみても、ひとは、くつの裏ですりつぶして消し去りたいと思うのではないか。奇怪なもの・気味悪いものは、われわれとともに存在させたくないということである。

子どもたちがへびに石をぶつけて鬨りものにしようとするのは、そうしても実は安全だからということもある。つながれている土佐犬を棒でなぐりつける近所のいたずら者でも、これがはなたれているときには、なぐろうとはしない。勝てる自信があるから、やっつけようというのである。へびは、踏付けたりしないかぎり、しつけのわるい飼い犬のように、ひとを襲うものではなく、ましてや呑み込むものでもない。本当は、おとなしくて、安全なのである。幼児がこれに石をぶつけても逆襲されることはない。へびは、他の小動物（ねずみとかとかげ、あるいは昆虫類）にくらべて大きい（長い）こともあって、子どもには襲いがいもある。えてして攻撃的闘争本能は、襲いがいのあるもので、危険視される面での大きな見かけをもち、かつ反撃されることが少ないというものに向かいやすい。へびは、その姿からいって奇怪なけものであり、なまいきにも人に恐怖心をいだかせ、これを襲ってもまず安全となれば、「いじめ」の標的にされやすい存在となってしまうのであろう。

真実をいうと、蛇ほどの平和主義の動物は少ないのではないか。毒蛇であっても、むやみに、ひとを襲うことはなく、ひっそりと生きている。もし、あれぐらいの存在感のあるもので、ゆえなく人畜を襲うようなことがあったら、とっくの昔に、日本狼のように絶滅させられ、生き延びてはいないであろう。穏やかで非暴力のへびは、ひとを見ると敬して遠ざかり、この世界の片隅でひっそりと暮らしている。戦力となりうる腕さえも放棄して五体投地を地でいく蛇は、平和のシンボルとなつていい存在である。ひとがいわれのないへびへの恐怖・偏見をもつことがなかったなら、広島平和公園には、折鶴ではなく、世界中のへびたちが何千何万と寄贈されて、あちこちにとぐろを巻いて静かに平和を祈るすがたを目にすることができたはずである。

註

- 1) 『新約聖書』 マタイの福音書 第10章
- 2) cf. Brueder Grimm; *Kinder-und Hausmaerchen*. KHM17(Die weisse Schlange)
- 3) cf. Brueder Grimm; *Kinder-und Hausmaerchen*. KHM16(Die drei

Schlangenblaetter)

- 4) H. ガスター 『世界最古の物語』(矢島文夫 訳) 現代教養文庫 805 1987年 61 ページ以下 参照
- 5) 石田英一郎 『桃太郎の母—比較民族学的論集—』 法政大学出版局 昭和31年 9頁以下 参照
- 6) 『今昔物語集』 卷第13 第43話 参照
- 7) 『古事記』 中巻 垂仁天皇
- 8) 『今昔物語集』 卷第14 第3話 参照
- 9) 『古今著聞集』 岩波書店 日本古典文学大系第84巻 通し番号695話 参照
- 10) 『今昔物語集』 卷第29 第39話 参照
- 11) 『日本霊異記』 中巻 第38 (慳食に因りて大きな蛇と成りし縁) 参照
- 12) 『今昔物語集』 卷第20 第24話 参照
- 13) 『今昔物語集』 卷第20 第23話
- 14) 『肥前国風土記』 松浦郡
- 15) 『常陸国風土記』 那賀郡 参照
- 16) 『日本書記』 卷第5 (崇神天皇 十年九月)
- 17) 『古事記』 中巻 神武天皇
- 18) 『日本霊異記』 中巻 第8
- 19) 『日本霊異記』 中巻 第8、第12 参照
- 20) 『今昔物語集』 卷第16 第16 参照
- 21) 『古今著聞集』 岩波書店 通し番号682話
- 22) 『日本霊異記』 中巻 第41
- 23) 『沙石集』 卷第7 (4) (蛇の人の妻を犯したる事) 参照
- 24) 『古今著聞集』 岩波書店 通し番号694話
- 25) cf. Brueder Grimm; *Kinder-und Hausmaerchen*. KHM91(Dat Erdmaenneken)
- 26) 『今昔物語集』 卷第28 第33
- 27) 『今昔物語集』 卷第2 第40
- 28) 『古今著聞集』 岩波書店 通し番号720話
- 29) 『今昔物語集』 卷第26 第2
- 30) cf. Brueder Grimm; *Kinder-und Hausmaerchen*. KHM92(Der Koenig vom goldenen Berg)
- 31) cf. Brueder Grimm; *Kinder-und Hausmaerchen*. KHM88(Das singende springende Loeweneckerchen)
- 32) Brueder Grimm; *Deutsche Sagen*. 13(Die Schlangenjungfrau)
- 33) 『イソップ寓話集』 山本光雄訳 岩波文庫 第82話
- 34) 『今昔物語集』 卷第5 第19 参照
- 35) Brueder Grimm; *Deutsche Sagen*. 223(Der Kroetenstuhl)
- 36) 『イソップ寓話集』 山本光雄訳 岩波文庫 第115話 第122話
- 37) 『旧約聖書』 創世記 第3章

(本論文は、平成24年3月『HABITUS』(西日本応用倫理学会・広島大学倫理
学研究室)第16巻 1～25頁 に掲載したものである。)